

改訂版デートバイオレンス・ハラスメント尺度の作成と分析(3)恋愛行動パターンとDVとの関連

越智, 啓太 / NAGANUMA, Satomi / 長沼, 里美 / KIIRE, Satoru / 甲斐, 恵利奈 / KAI, Erina / OCHI, Keita / 喜入, 暁

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学文学部紀要 / Bulletin of the Faculty of Letters, Hosei University

(巻 / Volume)

73

(開始ページ / Start Page)

109

(終了ページ / End Page)

126

(発行年 / Year)

2016-09-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00013435>

改訂版デートバイオレンス・ ハラスメント尺度の作成と分析 (3)

— 恋愛行動パターンとDVとの関連 —

越智 啓太・甲斐恵利奈
喜入 暁・長沼 里美

要 旨

本研究では、交際中のカップルにおける恋愛に対する態度や行動がデートバイオレンスやデートハラスメントとどのように関連しているかについて、9種類のオリジナルな尺度との関連を元に検討した。その結果、恋愛パターンのさまざまな側面がデートバイオレンスやハラスメントを促進したり、抑制していることが示された。

1. 問 題

近年、交際中のカップル間における暴力行為、ハラスメント行為が大きな問題となっている。夫婦や同居のカップル間における暴力行為はドメスティックバイオレンス (domestic violence) といわれるが、これに対して、未婚のカップル間の暴力や嫌がらせ行為は、デートバイオレンス (dating violence)、あるいはデートハラスメント (dating harassment) と呼ばれる。これらの行為は、「いやならば、別れてしまえばいいだけではないか」と思われることが多いが、実際には、「別れられない」、「別れることができない」ような状況になり、人権侵害的な状況が継続されることが少なくないため、その現状を把握し、これらの関係に対して対処したり、予防したりすることが必要である。しかしながら、現在のところ、とくに我が国ではデートバイオレンスについての実証研究は多くない。

そこで、我々は、デートバイオレンス、ハラスメントの程度を測定する尺度を作成し (越智・長沼・甲斐, 2014; 越智・喜入・甲斐・長沼, 2015a; 越智・喜入・甲斐・佐山・長沼, 2015b, 2016), 被害者や加害者の属性との関連やカップル間の恋愛進展状況との関連などについて分析を行ってきた。その結果、男性も女性と同様にデートバイオレンス・ハラスメントの被害に遭っていることや、加害者は、自分が加害行為をしていることを過小に評価しがちであることなどが示された。

本研究においては、カップル間の恋愛の関係のあり方や恋愛感情の個人差を測定する心理尺度を作成し、それらの個人差とデートバイオレンス・ハラスメントの関係を明らかにしてみたいと思う。

2. 方 法

調査参加者: あらかじめ調査会社のデータベースに登録されている調査協力候補者の中から、現

在異性と交際している、全国の18歳～39歳までの未婚の男女600名（男性300名、女性300名）を調査対象とした。交際の定義は、以下とした。「つきあっている（交際している）とは、一回以上ふたりきりでデートをしたことがあるということで、告白や正式な交際宣言などをしたりしている必要はない。他の人と平行して交際しているか否かは問わない」。

調査対象者の平均年齢は、28.79歳（標準偏差5.79）、男性28.78歳（標準偏差5.70）、女性28.79歳（標準偏差5.89）であった。日本全国のすべての県に1名以上の調査対象者が存在する。複数と交際している人はそのうちの任意の1名との関係について回答した。回答がぶれないようにはじめに対象者のイニシャルを識別子として記載させてから、回答をおこなわせた。なお、調査は株式会社・マーケティングに委託してウェブ調査で行った。回答所要時間は、おおむね5～15分程度である。参加者はこの調査に回答することで、のちに商品などと交換することが出来る一定のポイントを得ることが出来た。

実施した質問紙の内容：調査対象者には、自分自身と交際相手の年齢、職業、学歴、住所（県）、魅力度の評定、喫煙、飲酒頻度などの質問と、恋愛の進展状況、相手と別れた場合の次の交際相手を見つけるまでの推定期間、愛情・尊敬・友情尺度などの質問に回答させた。これらの項目に加えて、デートバイオレンス・ハラスメント被害尺度、加害尺度、そして恋愛行動に関するオリジナルな9種類の尺度を実施した。基本的な属性とデートバイオレンス・ハラスメントの関連については前報で報告済みである。今回は、デートバイオレンス・ハラスメント被害尺度、加害尺度と恋愛に関する9種類の心理尺度の関連を中心に分析を行うことにする。

デートバイオレンス・ハラスメント被害尺度：詳細は、越智・喜入・甲斐・佐山・長沼（2015）による。身体的暴力、間接的暴力、支配・監視、言語的暴力、性的暴力、経済的暴力、つきまとい・ストーキングの7つの下位尺度からなる。それぞ

れの被害の程度について「まったくない」、「ほとんどない」、「たまにある」、「ときどきある」、「よくある」の5段階で評定させる。

デートバイオレンス・ハラスメント加害尺度：詳細は、越智・喜入・甲斐・佐山・長沼（2016）による。上記のデートバイオレンス・ハラスメント被害尺度について、それぞれ被害項目を加害項目に変更して構成されたものである。身体的暴力、間接的暴力、支配・監視、言語的暴力、性的暴力、経済的暴力、つきまとい・ストーキングの7つの下位尺度からなる。それぞれの加害の程度について「まったくない」、「ほとんどない」、「たまにある」、「ときどきある」、「よくある」の5段階で評定させる。

恋愛に関する行動を測定する心理尺度(9種類)：恋愛行動やカップル間の関係のあり方には、さまざまなものが存在する。また、現在まで、このような個人差を測定するための尺度がいくつか作られてきた。しかし、これらの個人差尺度は恋愛に対する態度全般を測定するものが多く、恋愛行動の個々の側面や行動を構成する尺度はあまりつくられていない。そこで、本研究では、このような観点からオリジナルな9種類の尺度を構成し、それとデートバイオレンス・ハラスメントの関連について分析した。なお、各尺度についての詳細な説明は結果を参照して欲しい。今回構成したのは以下の尺度である。恋愛結晶化尺度、ひとめぼれ傾向尺度、再確認傾向尺度、拒絶敏感性尺度、監視欲求尺度、恋愛マキシマイザー尺度、恋愛妄想（空想）尺度、失恋反芻傾向尺度、社会的剥奪感尺度。

3. 結果と考察

恋愛結晶化尺度

尺度の概要：スタンダールは、その著書「恋愛論」のなかで、「愛の結晶化」現象について言及している。これは、恋愛をしていると相手のことを頭の中で何度も何度も反芻して考える結果、相手のポジティブな側面は次第に強固になっていき、

ネガティブな側面は次第に抑制されていき、相手は次第に理想化されてしまうという現象である。恋愛において、相手について反芻して考えるということはよく見られることであるが、これには個人差があると考えられる。交際相手に対する過度の理想化や思い込みは、恋愛初期などの「恋は盲目」状態の場合には、恋愛を盛り上げるかもしれないが、それ以外の場合には、理想と現実の相手のギャップを顕在化させ、その結果として、デートバイオレンス加害、とくに支配監視系のハラスメントを増加させる可能性がある。そこで、本研究では、この反芻して相手のポジティブな側面について考える恋愛結晶化傾向の個人差を測定する尺度を構成し、デートバイオレンス・ハラスメントとの相関について調べてみることにした。

尺度の作成:「○○と会っているときに起きた楽しいことを考えることが多い」、「○○が今ここにいるように想像することができる」などの11項目の尺度を実施し、その結果を重み付けのない最小二乗法で因子分析を行い、結果をプロマックス回転した。因子負荷の低い項目を削除した上で

何回か因子分析を繰り返し、最終的に Table 1 のような2因子からなる尺度を構成した。第1因子は、相手のことを意識的に何回も反芻して考えてしまう傾向を測定する尺度で「反復想起因子」と名付けた。第2因子は、日常的な場面において相手のことが侵襲的に想起されてしまう傾向を測定する因子で「侵入想起因子」と名付けた。反復想起因子は $\alpha = 0.908$ 、侵入想起因子は $\alpha = 0.935$ で比較的高い信頼性係数を示した。因子ごとの平均と標準偏差は、Table 2 のようになった。男女差について分散分析を行ったところ、反復想起因子では有意な差が見られなかった ($F(1,598) = 0.128, n.s.$) が、侵入想起因子では男性のほうが有意に得点が高くなった ($F(1,598) = 7.57, p < .01$)。

バイオレンス・ハラスメント尺度との関連: デートバイオレンス・ハラスメント被害尺度および加害尺度と恋愛結晶化傾向尺度の相関をとった結果を Table 3 にあげる。反復想起傾向は、被害行動の中では、身体、間接、言語、経済的ハラスメント行動と有意の負の相関があった。本研究の中で

Table 1 恋愛結晶化尺度の因子分析結果

	反復想起因子	侵入想起因子
○○のことを考えていると強い幸せを感じる	0.886	-0.075
○○と会っているときに起きた楽しいことを考えることが多い	0.893	-0.069
○○からいわれた嬉しい言葉を頭の中で何度も繰り返して考える	0.727	0.110
○○のことを考えると会えなくても近くに感じる	0.714	-0.012
○○が今ここにいるように想像することができる	0.709	0.019
○○とのデートの後にその日の出来事を何度も考える	0.756	0.105
考えないようにしても○○のことを考えてしまう	0.151	0.765
○○のことが頭の中から離れなくなることがある	0.081	0.831
○○のことを考えて眠れなくなることがある	-0.096	0.897
○○のことを考えると他のことに集中できない	-0.070	0.901
○○のことを途切れなく考え続けている	0.014	0.871
因子間相関		0.575

Table 2 恋愛結晶化尺度の男女別平均値と標準偏差

	反復想起因子	侵入想起因子
男性	26.23(6.56)	18.00(6.85)
女性	26.02(7.31)	16.42(7.21)

()内は標準偏差

負の有意な相関が見られたのは、この部分だけである。一方、加害行動との間にはほとんど関連はみられなかった。

侵入想起傾向については被害に関してはあまり有意な相関は得られていないが、加害に関しては、すべての加害項目と有意な相関が見られた。つまり、侵入想起傾向がある人は、相手に対して何らかの加害行動をしやすということになる。とくに支配監視とつきまといという、相手をコントロールしようとするハラスメントと相関が高かった。

なお、恋愛結晶化傾向はもちろん、相手に対する愛情の度合いと密接に関係を持っていると思われる。そこで、Rubinの恋愛尺度を再構成した越智ら(2016)の愛情尺度との相関をとって見たところ、反復想起傾向で、 $r = .635$ 、侵入想起傾向で $r = .486$ のそれぞれで $p < .01$ の有意な相関が見られた。そこでバイオレンス・ハラスメント加害と侵入想起傾向の関係が、愛情に媒介されている可能性を排除するために、愛情尺度の得点を統制して、偏相関係数を算出したが、その結果、すべてのバイオレンス・ハラスメント尺度との関係が $p < .01$ で有意となった(身体的暴力 $r = .209$ 、間接的暴力 $r = .180$ 、支配監視 $r = .290$ 、言語的暴力 $r = .154$ 、性的暴力 $r = .162$ 、経済的暴力 $r = .191$ 、つきまとい $r = .273$)。これは、愛情の度合いではなく、侵入想起傾向自体がバイオレンス・ハラスメント加害と関連していることを示している。

考察：相手のことを意識的に考えるという反復

想起行動は、バイオレンス、ハラスメント加害行動と関連がないが、侵入想起などの意識の制御を越えた結晶化行動が生じるほど、バイオレンス・ハラスメント、とくにコントロール系の加害行動を引き起こすのは興味深い現象だと思われる。ただし、因果関係についてはこのような侵入想起がバイオレンスやハラスメントを引き起こしているというよりも、一般的な行動の意識制御可能性といった特性が、バイオレンス・ハラスメント行動と侵入想起の両方に影響していると捉える方が良いであろう。

また、反復想起傾向は、バイオレンス・ハラスメントの被害と負の相関が見られた。つまり、これらの被害を抑制する傾向があるという結果になった。ただし、この結果は実際に、このような行動の被害に遭っていないというわけではなく、これらの被害に遭っていても、まさに結晶化によって相手のネガティブな側面を過小認知しているため、被害を認識することに失敗している可能性もある。そこでやはり、愛情尺度の得点を統制して、あらためて、反復想起傾向とバイオレンス・ハラスメント被害との偏相関を算出した。その結果、負の有意な相関はすべて消失し、すべての下位尺度で相関がなくなった(身体的暴力 $r = -.002$ 、間接的暴力 $r = -.034$ 、支配監視 $r = .034$ 、言語的暴力 $r = .004$ 、性的暴力 $r = .021$ 、経済的暴力 $r = .032$ 、つきまとい $r = .004$)、これは、反復想起傾向自体がバイオレンス・ハラスメントを抑制しているわけではないことを示している。

Table 3 恋愛結晶化傾向とデートバイオレンス・ハラスメント尺度の相関

	被 害						
	身体的	間接的	支配監視	言語的	性的	経済的	つきまとい
反復想起傾向	-.097*	-.120**	-.005	-.092*	-.040	-.091*	-.072
侵入想起傾向	.097*	.068	.222**	.043	.078	.050	.173**
	加 害						
	身体的	間接的	支配監視	言語的	性的	経済的	つきまとい
反復想起傾向	-.048	-.066	.032	-.041	.012	-.049	-.015
侵入想起傾向	.139**	.113**	.249**	.089*	.127**	.101*	.211**

* $p < .05$ ** $p < .01$

ひとめぼれ傾向尺度

尺度の概要:「ひとめぼれ」は、ひとめで会った人に恋ごごろを抱く現象であるが、もちろんこの傾向にも個人差は存在する。ひとめぼれがきっかけで結婚した場合でも、長期間の交際後の結婚でも結婚持続年数や子どもの数に違いは生じないという指摘もある (Barelds, & Barelds-Dijkstra, 2007) が、一方で、「ひとめぼれ」傾向が高い場合に、恋愛持続期間が短く、かつ交際人数も多くなるという指摘 (越智・喜入, 2015) もある。交際相手の選択に慎重な態度をとり、相手の性格や行動傾向の査定に時間を十分にとった場合には、デートバイオレンスやハラスメントの被害リスクが低くなる可能性があるし、また、交際相手との間にコンフリクトやトラブルが発生しにくくなるため、加害リスクも低くなることが予想される。このように考えると、ひとめぼれ傾向の高さは、デートバイオレンス・ハラスメントのリスク要因になる可能性がある。

しかし、現状では、ひとめぼれ傾向を測定する尺度が構成されていないため、このような仮説を検証することはできない。そこで、本研究では、ひとめぼれ傾向尺度を作成し、デートバイオレンス・ハラスメント被害・加害との関連について検討してみることにする。

尺度の作成:「出会ったばかりの相手に胸がいっぱいになることがある」、「相手の外見を見ただけでひきつけられることがある」など9項目の尺度を実施し、その結果を重み付けのない最小二乗法

で因子分析を行なった。その結果、一因子のみが抽出され、この因子のみで全体の58.3%の分散を説明することができた。因子負荷量を Table 4 にあげる。男女別に集計したところ、男性は平均33.42、標準偏差10.98、女性は平均28.23、標準偏差11.26となった。男女差を分散分析したところ、 $F(1,598) = 32.79$ で1%水準で有意になった。つまり、男性のほうがひとめぼれ傾向が大きいことがわかった。

バイオレンス・ハラスメント尺度との関連:デートバイオレンス・ハラスメント被害尺度および加害尺度とひとめぼれ傾向尺度の相関をとった結果を Table 5 にあげる。興味深いことにすべてのバイオレンス・ハラスメント項目で、また、被害、加害ともに $p < .01$ 以下の有意差で相関が見られた。また、すべての項目で相関係数は、被害よりも加害で高かった。なお、ひとめぼれ傾向には性差が見られたことから、性差を統制した偏相関係数を算出したが、この結果はかわらなかった。つまり、ひとめぼれ傾向が大きいほど、デートバイオレンス・ハラスメントの被害に遭うことも多く、また、自らもこれらの加害行為を行う傾向も大きいことが示された。

考察:当初の予測どおり、ひとめぼれ傾向は、デートバイオレンス・ハラスメントのリスクをある程度予測することが示された。これはやはり、交際相手を十分に査定しないで、直感的な感情で交際を開始することが、交際相手との間にコンフリクトやトラブルを生じさせやすいことを意味していると思われる。また、すべてのバイオレンス・

Table 4 ひとめぼれ傾向尺度の因子分析結果

	因子負荷量
初対面の人に恋ごごろを抱くことがある	0.800
ちょっとみただけなのに忘れられない人がいる	0.789
見かけただけの人のことを何度も考えることがある	0.795
出会ったばかりの相手に胸がいっぱいになることがある	0.817
相手の外見を見ただけで引きつけられることがある	0.711
自分と相性の合う人はひとめでわかる	0.650
町を歩いていて素敵な異性がいるとときめくことがある	0.759
町を歩いていて素敵な異性がいると目が引きつけられる	0.684

Table 5 ひとめぼれ傾向とデートバイオレンス・ハラスメント尺度の相関

ひとめぼれ傾向	被 害						
	身体的	間接的	支配監視	言語的	性的	経済的	つきまとい
ひとめぼれ傾向	.169**	.183**	.178**	.187**	.200**	.171**	.169**
ひとめぼれ傾向	加 害						
	身体的	間接的	支配監視	言語的	性的	経済的	つきまとい
ひとめぼれ傾向	.214**	.224**	.212**	.227**	.245**	.212**	.211**

* $p < .05$ ** $p < .01$

ハラスメントにおいて、被害よりも加害との相関が高かった。これは、ひとめぼれ傾向が二者間の関係性のコンフリクトから生じるだけでなく、衝動性や、攻撃性などの性格特性と関連している可能性があることを示唆している。ただしこれらの関係についてもひとめぼれ傾向がデートバイオレンス・ハラスメント行動を引き起こしているのか、それとも、ひとめぼれやデートバイオレンスを引き起こすような衝動性などの特性が両方の行動に影響しているかは本研究からは明らかにならない。今後の検討が必要であろう。

再確認傾向尺度

尺度の概要：恋愛における再確認傾向とは、交際相手に対して、自分に対する愛情の有無やその強さなどについてくり返して確認したくなる傾向のことである。再確認を行う動機は、自分自身に対する自信のなさや、相手とのつながりを実感できないこと、さらには次にあげる拒絶感性などの問題があると思われる。我が国では、勝谷(2004)が重要他者に対する再確認傾向尺度を作成しているが、この尺度は、恋愛関係に特化しているものではなく、愛情に対する再確認というよりは、能力や性格、信頼などに関する広範囲での

再確認を測定するものになっている。もちろん、勝谷の尺度で、恋愛関係における再確認傾向を測定することも可能であると思われるが、本研究では、彼女の尺度も参考にしながら、恋愛関係に特化した再確認傾向尺度を作成することにした。

再確認傾向尺度は、相手の行動を支配し管理することで満たされる可能性が大きいので、支配監視やつきまとい・ストーキング加害行動のリスク要因となることが予想される。

尺度の作成：「自分のことが本当に好きか確認したくなることがある」、「自分のことをどう思っているのか言葉にしていって欲しい」など6項目からなる尺度を実施し、その結果を重み付けのない最小二乗法で因子分析を行なった。その結果、一因子のみが抽出され、この因子のみで全体の70.4%の分散を説明することができた。因子負荷量をTable 6にあげる。勝谷の研究では、再確認願望と再確認行動のふたつの因子が抽出されているが、本研究では、一因子で尺度が構成できた。男女別に集計したところ、男性は平均25.49、標準偏差6.79、女性は平均28.49、標準偏差7.69となった。男女差を分散分析したところ、 $F(1,598) = 23.65$ で $p < .01$ で有意になった。つまり、女性のほうが再確認傾向が大きいことになる。再確認

Table 6 再確認傾向尺度の因子分析結果

	因子負荷量
自分のことが本当に好きか確認したくなることがある	0.865
自分のことをどう思っているのか言葉にして言ってほしい	0.837
自分のどこが好きなのか言ってほしい	0.833
自分のことを受けいれてくれているのか確かめたい	0.840
私のことを本当に大切にしているのかどうか確かめたい	0.874
好きと言ってくれないと不安になる	0.784

傾向尺度の信頼性係数は、 $\alpha = 0.934$ となった。

バイオレンス・ハラスメント尺度との関連・考察：再確認傾向とデートバイオレンス・ハラスメントの関連についてまとめたものを Table 9 にあげる。予想通り、加害、被害とも支配監視との有意な相関は見られたものの、相関係数の数値自体は非常に小さなものであり、また、つきまとい・ストーキングとは予想に反して有意な相関は得られなかった。総合的に考えれば、再確認傾向はデートバイオレンス・ハラスメントとあまり関連を持っていないということになる。

拒絶感性尺度

尺度の概要：拒絶感性は、交際相手の些細な行動を「自分のことを嫌いになったサインではないか」と深読みしてしまい、傷ついたり、相手に確認したくなったり、相手を拘束したり、監視したくなったりする傾向の個人差のことである。Downey, Freitas, Michaelis, & Khouri (1998) は、このような傾向が高いと、逆に相手からめんどくさいとかやっかいだと思われやすく、実際に相手から嫌われてしまうという自己成就のプロセスが生じてしまう可能性があるとして指摘している。さて、このような傾向が高いことはもちろん、そのまま、支配監視やつきまとい・ストーキングなどのハラスメント加害を促進する可能性があるし、また、最終的には身体的な暴力を引き起こす可能性もあると考えられる。そこで、本研究では、新たに拒絶感性に関する尺度を構成し、バイオレンスとハラスメントとの関連について調べてみることにした。

尺度の作成：「相手が私のことを嫌いになった

のではないかと思うことがある」「相手の行動の意味を深読みしてしまう」など5項目からなる尺度を実施し、その結果を重み付けのない最小二乗法で因子分析を行なった。その結果、一因子のみが抽出され、この因子のみで全体の72.3%の分散を説明することができた。因子負荷量を Table 7 にあげる。男女別に集計したところ、男性は平均20.14、標準偏差6.30、女性は平均21.82、標準偏差7.35となった。男女差を分散分析したところ、 $F(1,598) = 9.00$ で $p < .01$ で有意になった。つまり、女性のほうが拒絶感性が大きいことになる。拒絶感性尺度の信頼性係数は、 $\alpha = 0.929$ となった。

バイオレンス・ハラスメント尺度との関連・考察：拒絶感性とデートバイオレンス・ハラスメントの関連についてまとめたものを Table 9 にあげる。拒絶感性についても支配監視加害などと確かに有意な相関は認められたものの、全体的に相関係数は低い値であり、予想に反してその高さは、デートバイオレンス・ハラスメントの直接的なリスク要因とはならないことが示された。再確認欲求や拒絶感性は相手に対する行動自体はある程度変化させる可能性はあるのだが、それがより強力なバイオレンスやハラスメント行為に結びつくには少し距離があるのだろう。ただ、再確認傾向や拒絶感性は交際に対する不安を増大させる可能性はあるが、不安感と攻撃性と関連していることが多いので、再確認傾向・拒絶感性→不安→バイオレンス・ハラスメントという経路が存在している可能性がある。この経路については、今後も検討を続けていくことが必要であろう。

Table 7 拒絶感性尺度の因子分析結果

	因子負荷量
相手が私のことを嫌いになったのではないかと思うことがある	0.858
相手のちょっとした言動が気になって悩むことがある	0.853
しばしば嫌われてしまったのではないかと考える	0.854
相手の行動の意味を深読みしすぎてしまう	0.875
相手が冷たいと感じるとすぐに傷つく	0.813

監視欲求尺度

尺度の概要：監視欲求尺度は、再確認傾向や拒絶感性のような交際に対する不安を測定するものではなく、より直接的に、相手の行動を監視したいという欲求の程度を測定する尺度である。監視欲求の動機としては再確認傾向や拒絶感性があると思われるので、これらの尺度間には高い相関があることが予測される。監視欲求は、支配監視やつきまとい・ストーキングの行動と項目自体が概念的に重なるので、ここにも高い相関が生じることが予測される。やはり、監視欲求を直接測定する心理尺度は作られていないため、本研究ではこの尺度を構成して検討することにした。

尺度の作成：「相手の行動を監視したい」、「相手が自分以外の異性と話すのはできるだけ避けて欲しい」など6項目からなる尺度を実施し、その結果を重み付けのない最小二乗法で因子分析を行った。その結果、一因子のみが抽出され、この因子のみで全体の68.6%の分散を説明することが

できた。因子負荷量を Table 8 にあげる。男女別に集計したところ、男性は平均 19.35、標準偏差 8.62、女性は平均 19.12、標準偏差 8.53 となった。男女差を分散分析したところ、 $F(1,598) = 0.105$ で有意差はなかった。監視欲求尺度の信頼性係数は、 $\alpha = 0.928$ となった。

バイオレンス・ハラスメント尺度との関連：再確認傾向とデートバイオレンス・ハラスメントの関連についてまとめたものを Table 9 にあげる。この尺度は、直接的にハラスメント行為可能性について尋ねているため、予想通り、支配監視およびつきまとい・ストーキングの項目と有意で比較的高い相関を示した。また、そのほかのすべてのバイオレンス・ハラスメント行動とも高い相関を示した。また、相関は、ほとんどの項目において、被害よりも加害で顕著であった。

考察：監視欲求尺度は、再確認傾向 ($r = .427, p < .01$)、および拒絶感性 ($r = .576, p < .01$) と高い相関を示していた (ちなみに再確認傾向と拒絶感性も $r = .665, p < .01$)。ところが、再

Table 8 監視欲求尺度の因子分析結果

	因子負荷量
相手の行動を監視したい	0.882
相手が浮気しているのではないかと勘ぐる可能性がある	0.791
相手の携帯や手帳をチェックしたいと思うことがある	0.866
相手が自分以外の異性と話すのはできるだけ避けて欲しい	0.777
相手のすべての行動を監視したい	0.876
メールやLINEの返事がすぐに返ってこないと不安になる	0.769

Table 9 再確認傾向・拒絶感性・監視欲求とデートバイオレンス・ハラスメント尺度の相関

	被 害						
	身体的	間接的	支配監視	言語的	性的	経済的	つきまとい
再確認傾向	-.064	-.061	.123**	-.019	-.096*	-.024	-.059
拒絶感性	.030	.052	.210**	.067	.034	.034	.043
監視欲求	.238**	.245**	.418**	.215**	.179**	.174**	.259**
	加 害						
	身体的	間接的	支配監視	言語的	性的	経済的	つきまとい
再確認傾向	-.005	-.018	.148**	.021	-.047	.020	-.013
拒絶感性	.079	.089*	.231**	.102*	.076	.069	.077
監視欲求	.282**	.278**	.435**	.251**	.222**	.214**	.284**

* $p < .05$ ** $p < .01$

確認傾向や拒絶感性はデートバイオレンス・ハラスメント行動との相関はほとんどなく、この監視欲求のみがすべての行動との間に有意な相関が現れたことは興味深い。つまり、再確認や拒絶敏感という感情自体はバイオレンス・ハラスメントをひきおこさないが、これらの感情が監視欲求に結びつくプロセスが存在し、それが最終的な行動のリスクをあげてしまうということになるといえるであろう。このプロセスについては今後さらに検討することが必要だろう。

恋愛マキシマイザー尺度

尺度の概要：Schwartz, Ward, Monterosso, Lyubomirsky, White, K., & Lehman, (2002) は、消費行動を分析する中で、消費者の中には、「常に最良のものを追求する」ものと「他にもっと良い選択肢があろうとなかろうと、とりあえず満足できるものを求める」ものに分類し、前者をマキシマイザー（最大化指向者 maximizer）、後者をサティスファイサー（満足指向者 satisficer）と呼んだ。彼らの概念では、これらは一次元の尺度であり、個人は、マキシマイザーとサティスファイサーを両極とするとどこかに位置づけられることになる。また、彼らは、これを測定するマキシマイジング尺度（maximization scale）を作成した。この尺度は、「買い物の時本当に気に入った服を探すのに苦勞する」、「何かを選ぶときは、その時点では存在しないものも含め、あらゆる可能性について考えてみる」などの項目からなるものである。彼らの研究では、マキシマイジング傾向が大きいほど、幸福度、楽観性、自尊心、生活満足度が低く、抑うつ傾向が高いことが示されている。つまり、マキシマイザーは不幸なのである。

ところで、恋愛行動における交際相手選択においても、マキシマイザー—サティスファイサーの軸を仮定することは可能である。つまり、恋人や配偶者を選ぶ場合に、常に最良、最高のものをもとめて追求を続ける者と、とりあえず満足する相手と交際する者である。Schwartz らの尺度においても、「わたしは恋愛関係を服のように見なし

ている、ぴったりの人を見つけるまでにいろいろ試してみたい」という恋愛に関する項目は1項目含まれているが、あくまで、さまざまな消費行動すべてを扱うのが、この尺度の特徴であった。そこで、本研究では、このマキシマイジング尺度を恋愛に関して特化させた尺度を構成することにした。

デートバイオレンスとこの尺度の関連について言えば、恋愛マキシマイジング傾向の低いもの、つまり、恋愛サティスファイサーは基本的に現在の交際相手や配偶者で満足する可能性が大きいと考えられるので、あらゆる種類のバイオレンス、ハラスメントを抑制すると思われる。つまり、恋愛マキシマイジング傾向とバイオレンス、ハラスメント加害は正の相関があると思われる。この点について検討することにした。

尺度の作成：「恋人ができた後に、もっと良い人がいた可能性を考えて後悔することがある」、「たとえ交際相手がいてももっと良い相手がいないかと探している」など20項目からなる尺度を実施し、その結果を重み付けのない最小二乗法で因子分析を行ない、プロマックス回転を行った。その結果、4つの因子が抽出されたが、このうち、「恋愛をする上で過ぎてしまったことについて『こうすれば良かった』と考えることがよくある」などの項目からなる因子は、恋人選択における後悔というよりは過去の恋愛行動に関する後悔であることから、その因子に負荷の高い項目は削除し、また、当初、反転項目として設定した「交際相手がいるときは浮気心は起きない」、「そのとき、つきあっている相手がいつも最高の相手である」は独立の因子を形成してしまったのでやはり、その因子に負荷の高い項目は削除した。残った項目について因子分析を繰り返して、5項目ずつからなる2因子の尺度を構成した。第1因子は、恋愛において交際相手選択についての後悔の程度を示すものとして「後悔因子」、第2因子は、つねに最良の交際相手を探し続けるという「追求因子」とした。なお、マキシマイザーは、この両方の特徴をもっているものだと考えられるので、後悔因子

と追求因子の合計点を恋愛に関するマキシマイザー得点とした。パターン行列を Table 10 にあげる。男女別に集計した結果を Table 11 にあげる。男女差を分散分析したところ、後悔尺度は $F(1,598) = 0.279$ 、追求尺度 $F(1,598) = 0.939$ 、マキシマイザー得点 $F(1,598) = 0.826$ といずれも有意差はなかった。信頼性係数は、後悔尺度 $\alpha = 0.881$ 、追求尺度 $\alpha = 0.835$ 、マキシマイザー得点 $\alpha = 0.902$ となった。

Schwartz のマキシマイジング尺度の得点が高いほど、生活に対する満足度が低いことが示されている。そこから類推すると、今回作成した恋愛マキシマイザー得点と交際相手との交際満足度もマイナスの相関をする可能性がある。そこで、これらの間の関連をみたところ、予想通り、後悔尺度 $r = -.125$ 、追求尺度 $r = -.068$ 、マキシマイザー尺度 $r = -.105$ の相関があった。後悔尺度とマキシマイザー尺度は低いながらもそれぞれ1%水準で有意な負の相関があり、これらの尺度の得点が高いほど、満足度は低いという消費におけるマキシマイザー傾向と同様な結果が得られた。ただし、追求尺度との関連は有意ではなかった。

バイオレンス・ハラスメント尺度との関連：恋愛マキシマイジング尺度とデートバイオレンス・ハラスメント尺度の相関を Table 12 に示す。予想通り、すべての項目で、後悔尺度、追求尺度、マキシマイザー尺度とバイオレンス・ハラスメント被害と有意な相関が見られた。全体的に追求尺度は、後悔尺度よりも相関が高かった。また、バイオレンス・ハラスメント被害についても性的暴力と後悔尺度の関連を除くすべての間に有意な相関が見られた。

考察：予想通りの結果が得られた。ただし、被害に関しても恋愛マキシマイザーと関連していたのは予想外であった。この点に関しては、恋愛マキシマイジング傾向が高いことが加害行動を引き起こし、それが被害行動の引き金になるという可能性もあるかもしれない。とくに、恋愛マキシマイジング傾向が高いことが言語的な暴力（不満や文句）を引き起こし、それが反撃を招いているという因果関係があるのではないか（実際問題として、恋愛マキシマイジング傾向ともっとも相関が高いのは言語的なハラスメントの加害である）と思われる。全体的に見て、このような恋人、配偶

Table 10 恋愛マキシマイザー尺度の因子分析結果

	後悔因子	追求因子
恋人ができた後にもっといい人がいた可能性を考えて後悔することがある	0.846	0.054
恋人が良い人であったとしても「もっと良い人がいただろうに」と思ってしまうことが多い	0.858	-0.035
恋人ができた後に、他の人にしておけば良かったと思うことがある	0.857	0.011
つきあうために努力した相手でも、いざつきあってみると後悔することが多い	0.682	0.081
恋愛において優柔不断である	0.520	0.035
誰かと交際するかという決断をするときは、他の人ではどうかと考えてみる	0.045	0.693
つねに理想の恋人を追い求めている	-0.069	0.726
たとえ交際している人がいてももっと良い人がいないかと探している	0.114	0.722
交際相手がいても合コンなどに出てみたいと思う	0.019	0.642
誰かと交際する前には、その人と他の異性を比較してることが多い	0.121	0.605
因子間相関		0.723

Table 11 恋愛マキシマイザー尺度の男女別平均値と標準偏差

	後悔因子	追求因子	マキシマイザー
男性	17.85(6.42)	17.79(6.05)	35.63(11.51)
女性	18.11(6.09)	17.32(5.83)	35.43(10.73)

()内は標準偏差

Table 12 恋愛マキシマイザー尺度とデートバイオレンス・ハラスメント尺度の相関

	被 害						
	身体的	間接的	支配監視	言語的	性的	経済的	つきまとい
後悔尺度	.098*	.109**	.090*	.149**	.077	.114**	.097*
追求尺度	.161**	.154**	.128**	.191**	.130**	.168**	.141**
恋愛マキシマイザー尺度	.125**	.114**	.132**	.169**	.093*	.146**	.112**
	加 害						
	身体的	間接的	支配監視	言語的	性的	経済的	つきまとい
後悔尺度	.129**	.098*	.151**	.158**	.093*	.152**	.106**
追求尺度	.190**	.149**	.189**	.203**	.149**	.199**	.161**
恋愛マキシマイザー尺度	.192**	.166**	.173**	.216**	.153**	.201**	.165**

* $p < .05$ ** $p < .01$

者選択に関する選択方略がデートバイオレンス・ハラスメントと関連していることが明らかになったことは興味深いことであろう。

恋愛妄想（空想）尺度

尺度の概要：恋愛結晶化傾向は、現に交際している相手に対するポジティブな反思考を測定していた。一方で、「恋愛を夢見る傾向」つまり、現実的ではないような恋愛を空想する傾向を恋愛妄想傾向、あるいは恋愛空想傾向と呼ぶことにする。このような傾向は思春期には増加すると思われる。さて、恋愛妄想は、デートバイオレンス・ハラスメントとどのように関連するのか。現在、交際相手がいる場合、この恋愛空想はその交際相手以外の恋愛を夢見る傾向である。そのため、現在の交際相手に対する不満は増大する可能性がある。これは、関係を維持させることに執着する支配監視やストーキング・つきまとい系のバイオレンス・ハラスメントにはあまり影響しないが、身

体的な暴力や間接的な暴力と関連する可能性はあるかもしれない。そこで、本研究では、恋愛妄想（空想）についての尺度を構成し、デートバイオレンス・ハラスメントとの関連について明らかにしてみようと思う。

尺度の作成：「こんな恋がしたいと考えることがよくある」、「ありえないような恋愛ストーリーを頭の中で考えることがある」など7項目からなる尺度を実施し、その結果を重み付けのない最小二乗法で因子分析を行なった。その結果、一因子のみが抽出され、この因子のみで全体の67.1%の分散を説明することができた。因子負荷量をTable 13にあげる。男女別の得点をTable 15にあげる。この差を分散分析したところ、 $F(1,598) = 0.803$ で有意差はなかった。信頼性係数は、 $\alpha = 0.934$ となった。

バイオレンス・ハラスメント尺度との関連：恋愛妄想傾向は、身体的、間接的なバイオレンス・ハラスメント被害とは相関がなかったが、それ以

Table 13 恋愛妄想（空想）尺度の因子分析結果

	因子負荷量
こんな恋がしたいと考えることがよくある	0.797
恋愛についてあれこれ考えることがよくある	0.808
理想の恋人とデートしていることを空想する	0.834
恋に恋する傾向がある	0.769
素敵な恋人ができた場合のことを頭の中で考える	0.883
ありえないような恋愛ストーリーを頭の中で考えることがある	0.789
運命的な出会いについて空想することがある	0.848

外のすべての被害項目、およびすべてのタイプの加害項目と有意な相関があった。予想に反して身体的な暴力などよりも、支配監視などの暴力のほうが相関が高かった。ただし、ほとんどの相関係数は、 $r = .1 \sim .2$ 程度であり、相関係数はそれほど高いものではなかった。

考察：当初の想定では、恋愛妄想傾向が高いということは現在交際中の相手以外に対する恋愛妄想が高いということであった。しかし、実際には、恋愛妄想傾向と現在の交際相手との恋愛の満足度との相関は $r = -.067$ でほとんど存在しなかった。そのため、当初想定していたような、恋愛妄想→現在の交際相手への不満→バイオレンス・ハラスメントという経路は存在しないと思われる。むしろ、恋愛妄想が高いことは、自分の考えているような恋愛行動をしたい、されたいと考える傾向が大きく、そのため、相手に対して過度な積極性が生じてしまい、それがバイオレンス・ハラスメント尺度との正の相関を形成してしまっている可能性はあるかもしれない。たとえば、ロマンティックな恋愛をしたいと自分では「夢」見ているが、交際相手があまり積極的でない場合、強引に身体的な接触をしたり、相手につきまとったりする可能性はあるかもしれない。

失恋反芻傾向尺度

尺度の概要：恋愛における反芻試行の一つの形

は恋愛結晶化傾向にみられたようなものであるが、恋愛結晶化傾向はどちらかといえば、恋愛のポジティブな側面の反芻傾向であった。これに対して、過去の失恋を何度も想起したり、侵入思考したりする傾向については、従来、あまり検討されてこなかった。このような反芻傾向は、次の恋愛を妨害するために、恋愛関係の成立に負の影響を与える可能性があるが、それ以外にもたとえば、過去のトラウマティックな失恋体験の再現を回避するために、相手に対して支配監視、つきまとい・ストーキング等の加害行動を促進させる可能性もあると思われる。このようなメカニズムはPTSDにおける、トラウマティックな体験を回避するための行動と類似していると思われる。本研究では、そこで、恋愛のネガティブな特性に特化した反芻尺度を構成し、それとデートバイオレンス・ハラスメントとの関連について調査してみる。

尺度の作成：「過去に失恋したことなどを何度も思い出す」、「過去に失恋したときのことを鮮明に記憶している」など5項目からなる尺度を実施し、その結果を重み付けのない最小二乗法で因子分析を行なった。その結果、一因子のみが抽出され、この因子のみで全体の73.4%の分散を説明することができた。因子負荷量をTable 14にあげる。また、男女別の得点をTable 15にあげる。この差を分散分析したところ、 $F(1,598) = 0.210$ で有意差はなかった。信頼性係数は、 $\alpha = 0.932$ と

Table 14 失恋反芻尺度の因子分析結果

	因子負荷量
過去に失恋したことなどを何度も思い返す	0.911
過去に失恋した時のことを鮮明に記憶している	0.832
好きな人ができると過去の失恋の記憶を思い出す	0.805
恋で傷ついた記憶を思い出しやすい	0.891
失恋したらそのことを何度も頭の中でくり返し考える	0.840

Table 15 恋愛妄想(空想)、失恋反芻、社会的剥奪尺度の男女別平均値と標準偏差

	恋愛妄想尺度	失恋反芻尺度	社会的剥奪尺度
男性	25.42(9.72)	18.52(7.25)	25.07(8.45)
女性	26.13(9.68)	18.25(7.54)	24.05(7.18)

()内は標準偏差

Table 16 恋愛妄想・失恋反芻尺度とデートバイオレンス・ハラスメント尺度の相関

	被 害						
	身体的	間接的	支配監視	言語的	性的	経済的	つきまとい
恋愛妄想 (空想)	.077	.075	.202**	.136**	.111**	.127**	.112**
失恋反芻	.094*	.090*	.181**	.157**	.085*	.076	.080
	加 害						
	身体的	間接的	支配監視	言語的	性的	経済的	つきまとい
恋愛妄想 (空想)	.123**	.117**	.229**	.173**	.155**	.154**	.150**
失恋反芻	.142**	.128**	.207**	.189**	.127**	.109**	.120**

* $p < .05$ ** $p < .01$

なった。

バイオレンス・ハラスメント尺度との関連：失恋反芻傾向は、経済的虐待とつきまとい被害とは、相関がなかったがそれ以外のすべてのバイオレンス・ハラスメント被害項目、すべてのバイオレンス・ハラスメント加害項目と有意な相関があった。ただし、この相関もいずれも、 $r = .1 \sim .2$ 程度であり、それほど高いものではなかった。

考察：失恋反芻傾向の高いものは、失恋を恐れるために、つきまといなどの行為の加害頻度があがるのではないかという当初の想定だった。確かにこれらの間には、相関は見られたがその値はきわめて小さく、当初想定したような因果関係が存在していると結論づけることはできないであろう。ちなみに失恋反芻傾向は、恋愛妄想傾向と $r = .51$ の比較的高い有意な相関があることから、恋愛関係について空想したり、反芻したりする個人的な傾向があるのは確かであろう。しかし、失恋反芻傾向も、恋愛満足度とは $r = .004$ と全く相関はないことなどから総合的に考えると、失恋反芻や恋愛妄想と行った恋愛に対する想像力は、現に行われている恋愛行動とあまり関係ない特性なのだと思う。

社会的剥奪感尺度

尺度の概要：社会的剥奪感尺度は、越智ら (2015a) が、デートバイオレンスをはじめとした反社会行為を予測するために構成した尺度である。この尺度は、社会に対する不満感の中でとくに相対的な剥奪感、つまり社会は不公平で自分は

もっと賞賛されたりすべきなのに自分の能力に見合った待遇を受けていないという感覚を測定する尺度である。このような感覚は、攻撃性や暴力などと関連していることが予想され、事実、越智ら (2015a) の研究ではデートバイオレンス行動と高い相関を持っていた。ただし、越智ら (2015a) はこの尺度を交際相手を評定する他者評定尺度として用いている。つまり、「彼は世の中は不公平で自分は損をしていると思っていますか」といった項目から構成されていた。今回の調査では、自己評定式の尺度を実施し、同様にデートバイオレンス・ハラスメント行為を予測できるかどうかを検討してみる。

尺度の作成：「世の中は不公平で自分は損をしている」、「自分以外の周りの人間はみな頭が悪いと思う」など7項目からなる尺度を実施し、その結果を重み付けのない最小二乗法で因子分析を行った。その結果、一因子のみが抽出され、この因子のみで全体の49.27%の分散を説明することができた。因子負荷量を Table 17 にあげる。また、男女別の得点を Table 15 にあげる。この差を分散分析したところ、 $F(1,598) = 2.505$ で有意差はなかった ($p = .114$)。信頼性係数は、 $\alpha = 0.871$ となった。

バイオレンス・ハラスメント尺度との関連：社会的剥奪感尺度と、各種のバイオレンス・ハラスメント尺度の得点の相関を、Table 18 に示す。予想通り、社会的剥奪感尺度は、すべてのバイオレンス・ハラスメント尺度項目と相対的に大きな相関が見られることがわかった。とくにほとんど

Table 17 社会的剥奪感尺度の因子分析結果

	因子負荷量
世の中は不公平で自分は損をしている	0.759
成功した人などについての話が嫌いである	0.730
自分は社会から能力に見合った待遇を受けていない	0.716
世の中のいろいろなことについて不満が多い	0.653
人のことをほめるよりはけなすことの方が多い	0.687
目の前で人がほめられると機嫌が悪くなる	0.693
自分以外の周りの人間はみな頭が悪い	0.669

Table 18 社会的剥奪傾向とデートバイオレンス・ハラスメント尺度の相関

社会的剥奪傾向	被 害						
	身体的	間接的	支配監視	言語的	性的	経済的	つきまとい
	.183**	.188**	.245**	.218**	.206**	.177**	.195**

社会的剥奪傾向	加 害						
	身体的	間接的	支配監視	言語的	性的	経済的	つきまとい
	.228**	.234**	.278**	.261**	.255**	.230**	.246**

* $p < .05$ ** $p < .01$

Table 19 恋愛行動に関する各種尺度とデートバイオレンス・ハラスメント行動の関連のまとめ

	被 害						
	身体的	間接的	支配監視	言語的	性的	経済的	つきまとい
反復想起傾向	-.097*	-.120**	-.005	-.092*	-.040	-.091*	-.072
侵入想起傾向	.097*	.068	.222**	.043	.078	.050	.173**
ひとめぼれ傾向	.169**	.183**	.178**	.187**	.200**	.171**	.169**
再確認傾向	-.064	-.061	.123**	-.019	-.096*	-.024	-.059
拒絶敏感性	.030	.052	.210**	.067	.034	.034	.043
監視欲求	.238**	.245**	.418**	.215**	.179**	.174**	.259**
後悔因子	.098*	.109**	.090*	.149**	.077	.114**	.097*
追求因子	.161**	.154**	.128**	.191**	.130**	.168**	.141**
恋愛マキシマイザー	.125**	.114**	.132**	.169**	.093*	.146**	.112**
恋愛妄想(空想)傾向	.077	.075	.202**	.136**	.111**	.127**	.112**
失恋反芻傾向	.094*	.090*	.181**	.157**	.085*	.076	.080
社会的剥奪傾向	.183**	.188**	.245**	.218**	.206**	.177**	.195**

	加 害						
	身体的	間接的	支配監視	言語的	性的	経済的	つきまとい
反復想起傾向	-.048	-.066	.032	-.041	.012	-.049	-.015
侵入想起傾向	.139**	.113**	.249**	.089*	.127**	.101*	.211**
ひとめぼれ傾向	.214**	.224**	.212**	.227**	.245**	.212**	.211**
再確認傾向	-.005	-.018	.148**	.021	-.047	.020	-.013
拒絶敏感性	.079	.089*	.231**	.102*	.076	.069	.077
監視欲求	.282**	.278**	.435**	.251**	.222**	.214**	.284**
後悔因子	.129**	.098*	.151**	.158**	.093*	.152**	.106**
追求因子	.190**	.149**	.189**	.203**	.149**	.199**	.161**
恋愛マキシマイザー	.192**	.166**	.173**	.216**	.153**	.201**	.165**
恋愛妄想(空想)傾向	.123**	.117**	.229**	.173**	.155**	.154**	.150**
失恋反芻傾向	.142**	.128**	.207**	.189**	.127**	.109**	.120**
社会的剥奪傾向	.228**	.234**	.278**	.261**	.255**	.230**	.246**

* $p < .05$ ** $p < .01$

Table 20 恋愛行動に関する各種尺度とデートバイオレンス・ハラスメント行動の関連のまとめ (有意差)

	被 害						
	身体的	間接的	支配監視	言語的	性的	経済的	つきまとい
反復想起傾向	<*	<**	n.s.	<*	n.s.	<*	n.s.
侵入想起傾向	*	n.s.	**	n.s.	n.s.	n.s.	**
ひとめぼれ傾向	**	*	**	**	**	**	**
再確認傾向	n.s.	n.s.	**	n.s.	<*	n.s.	n.s.
拒絶敏感性	n.s.	n.s.	**	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
監視欲求	**	**	**	**	**	**	**
後悔因子	*	**	**	**	n.s.	**	*
追求因子	**	**	**	**	**	**	**
恋愛マキシマイザー	**	**	**	**	*	**	**
恋愛妄想 (空想) 傾向	n.s.	n.s.	**	**	**	**	**
失恋反芻傾向	*	*	**	**	*	n.s.	n.s.
社会的剥奪傾向	**	**	**	**	**	**	**

< >はマイナスの有意な相関があることを示している

	加 害						
	身体的	間接的	支配監視	言語的	性的	経済的	つきまとい
反復想起傾向	n.s.						
侵入想起傾向	**	**	**	*	**	*	**
ひとめぼれ傾向	**	**	**	**	**	**	**
再確認傾向	n.s.	n.s.	**	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.
拒絶敏感性	n.s.	*	**	*	n.s.	n.s.	n.s.
監視欲求	**	**	**	**	**	**	**
後悔因子	**	**	**	**	**	**	**
追求因子	**	**	**	**	**	**	**
恋愛マキシマイザー	**	**	**	**	**	**	**
恋愛妄想 (空想) 傾向	**	**	**	**	**	**	**
失恋反芻傾向	**	**	**	**	**	**	**
社会的剥奪傾向	**	**	**	**	**	**	**

* $p < .05$ ** $p < .01$

の尺度で被害<加害で相関が高いという特徴があった。

考察：先行研究においては、被害者側から加害者の社会的剥奪感を評定したものとバイオレンス・ハラスメントと関連していることが示されていたが (越智ら 2015a)、本研究では、自己評定された社会的剥奪感がバイオレンス・ハラスメントの被害と加害の両方と関連していることが明らかになった。加害項目との相関のほうが大きいことを考えると、この個人特性と被害との関係は、加害を経由したもの、つまり、社会的剥奪感が大きいいため、デートバイオレンスが発生しやすく、その結果として反撃被害を受けやすいという経路も存

在している可能性がある。

4. ま と め

今回作成した恋愛行動尺度とバイオレンス・ハラスメントとの関連

本研究では、新たに作成した9種類の恋愛行動尺度とデートバイオレンス・ハラスメントとの関連について調査した。ここで結果の相関係数をまとめたもの (Table 19) と、その相関係数についての統計的有意差検定の結果をまとめたもの (Table 20) を示してみる。非常に高い相関のものはいだされなかったが、多くの尺度が、デー

トバイオレンス・ハラスメント加害・被害と関連していることがわかった。また、本研究で取り上げたさまざまな恋愛行動の多くが、デートバイオレンス・ハラスメントを促進する方向に作用するものであった。

今回作成した恋愛行動尺度間の関連

今回作成した9個の恋愛尺度の下位尺度間の関連を示すために重み付けのない最小二乗法で因子分析を行い、プロマックス回転を行った(恋愛マキシマイザー得点については後悔尺度と追求因子の合計なので、因子分析の対象項目には含めなかった)。その結果、固有値1の基準で2つの因子が抽出された。第2因子までで全体の分散の49.5%が説明された。因子間相関は $r = .531$ であった。回転後のパターン行列をTable 21に示す。第1因子はおもに、意識的な反復試行など「制御された恋愛行動」、第2因子は「衝動的な恋愛行動」を示すように思われるが、その双方に負荷している尺度もあり、今回行った尺度を明確にグループ分けすることはできなかった。また、第1因子、第2因子とも特定の種類のデートバイオレンス・ハラスメント行動と関連しているという明確な傾向は見られなかった。

今後の課題

本研究の結果、恋愛行動のさまざまな側面の個人差がデートバイオレンス・ハラスメントと関連

しているということが明らかになった。また、それぞれの尺度で測定された個人差が加害のみでなく、被害にも同様に関連しているのは非常に興味深いことだと思われる。その理由としては、もちろん、被験者の回答バイアス(加害で高い評定をするものは被害でも高い評定をする傾向がある)などにもある程度はもとめられるであろうが、その種のバイオレンス・ハラスメント加害行動が、最終的には相手からの反撃を誘発し被害も増加させるなどの経路についてもさらに分析していくことが必要であろう。

本研究をはじめとした一連の研究の目的は、普段の恋愛行動から将来のデートバイオレンス・ハラスメントを予測することにある。今回、バイオレンスに関連するいくつかの尺度を明らかにすることができたということは、この目標を実現するためにも非常に意味のあることである。今後は、これらの尺度、あるいはその組み合わせによって、デートバイオレンス・ハラスメントをその発生前に予測することができるのかについて、プロスペクティブな研究も含め、さらに研究を進めていくことが必要である。

注

本研究は、科学研究費補助金(基盤研究C)の助成を受けて行われた。

Table 21 恋愛行動に関する各種尺度の因子分析結果

	第1因子	第2因子
反復想起傾向	0.796	-0.314
侵入想起傾向	0.668	0.036
ひとめぼれ傾向	-0.026	0.714
再確認傾向	0.741	-0.065
拒絶敏感性	0.717	0.109
監視欲求	0.494	0.333
後悔因子	-0.208	0.801
追求因子	-0.114	0.866
恋愛妄想(空想)傾向	0.378	0.433
失恋反芻傾向	0.353	0.360
社会的剥奪傾向	0.220	0.457

参考文献

- Barelds, D. P., & Barelds-Dijkstra, P. (2007). Love at first sight or friends first? Ties among partner personality trait similarity, relationship onset, relationship quality, and love. *Journal of Social and Personal Relationships*, 24(4), 479-496.
- Downey, G., Freitas, A. L., Michaelis, B., & Khouri, H. (1998). The self-fulfilling prophecy in close relationships: rejection sensitivity and rejection by romantic partners. *Journal of personality and social psychology*, 75(2), 545.
- 勝谷紀子 (2004). 改訂版重要他者に対する再確認傾向尺度の信頼性・妥当性の検討. パーソナリティ研究, 13(1), 11-20.
- 越智啓太 (2014). ケースで学ぶ犯罪心理学. 北大路書房
- 越智啓太 (2015). 恋愛の科学. 実務教育出版
- 越智啓太・喜入暁 (2015). 「ひとめぼれ傾向」尺度の作成と分析 — ビビビはどの程度恋愛の持続を予測するか —. 日本パーソナリティ心理学会第24回大会発表論文集, PC-13
- 越智啓太, 長沼里美, 甲斐恵利奈 (2014). 大学生に対するデートバイオレンス・ハラスメント尺度の作成. 法政大学文学部紀要, 69, 63-74.
- 越智啓太, 喜入暁, 甲斐恵利奈, 長沼里美 (2015a). 女性蔑視的態度がデートハラスメントに及ぼす効果. 法政大学文学部紀要, 70, 101-110.
- 越智啓太, 喜入暁, 甲斐恵利奈, 佐山七生, 長沼里美 (2015b). 改訂版デートバイオレンス・ハラスメント尺度の作成と分析(1) — 被害に焦点を当てた分析 —. 法政大学文学部紀要, 71, 135-147.
- 越智啓太, 喜入暁, 甲斐恵利奈, 佐山七生, 長沼里美 (2016). 改訂版デートバイオレンス・ハラスメント尺度の作成と分析(2) — 加害に焦点を当てた分析 —. 法政大学文学部紀要, 72, 161-171.
- Schwartz, B., Ward, A., Monterosso, J., Lyubomirsky, S., White, K., & Lehman, D. R. (2002). Maximizing versus satisficing: happiness is a matter of choice. *Journal of personality and social psychology*, 83(5), 1178-1197.

Development of a revised dating violence/ harassment scale (3)

Keita OCHI, Erina KAI, Akira KIIRE and Satomi NAGANUMA

Abstract

This study investigate how couples in a relationship's attitude and behavior towards love relationship relate to dating violence and dating harassment, using nine psychological measurers originally developed by authors. In result, various aspects of love relationship patterns showed reinforcing or inhibiting effects on dating violence and dating harassment.